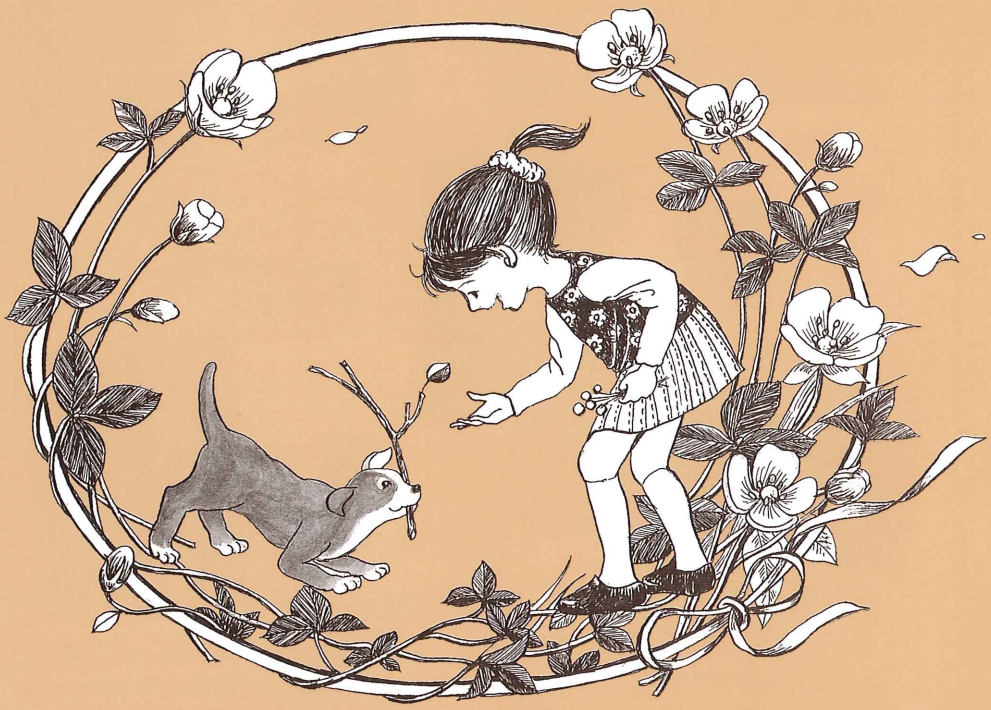
幼児の教育　第109巻　第11号　平成22年11月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

特集
いま、倉橋と出会う10
「子どもの心のはだ」

11
2010



第109巻　第11号　日本幼稚園協会

好評発売中

“森のようちえん”での活動を撮った18万枚の写真から厳選！

保育・子育てのエッセンスが詰まった写真集

子どもと森へ出かけてみれば

小西貴士／写真・ことば

**自然の中で子どもたちは
こんなにいい顔するんだな**

いろんな葉っぱがあるけれど
同じ葉っぱはないように
あなたはあなたのままでいいですよ
そのまんまが素敵です
森は、そんな風が吹いている場所
ページをめくり
森のお散歩を楽しんでくださいね

24×18cm　76ページ　定価 1,575円（税込）

10920

オールカラー

●四季の森で育つ子どもたちの写真とやさしいことばで織り成すとっておきの世界
●巻末「子どもと森へ」
寄稿：汐見稔幸氏、上遠恵子氏、細谷亮太氏

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第109巻　第11号

目　次

● 巻頭言 ●
保育実践の質の向上のために　勅使千鶴　4

● 特 集 ●
いま、倉橋と出会う 10 「子どもの心のはだ」　8

触れ合いの奥で　土屋とく　9

「子どもの心のはだ」によせて　下山田裕彦　12

心の覆い —— 命を育むもの　白井貴之　18

肌が触れて感じる温かさ　山下紗織　22

◆ インタビュー ◆
倉橋惣三と私（1）　森上史朗　26

乳幼児期の育ちと保育を考える
幼児の教育
第109巻　第11号

最終回
● 教育学者のあたふた子育て・親育ち（4）●
子どもをもたない保育者の専門性とは（2）　佐久間亜紀　34

● 保育の創意工夫 11 ●
守られる赤ちゃん　前原　寛　40

● 幼稚園の源流を求める旅　森有礼の第二次在米時代（9）●
教育への具体的視座　国吉　栄　44

● 園のくらしを育む 8 ●
日本の保育文化（2）— 芋掘り —　秋田喜代美　48

●『幼児の教育』ネット公開に寄せて（19）●
コンテンツを通じて見る「母」の〈名〉とメッセージ　秋山麻実　52

● 保育の現場から ●
イチョウの葉っぱの枕やさん　佐藤寛子　58

巻頭言

保育実践の質の向上のために

――実践記録に学ぶ――

勅使千鶴

いま、幼稚園や保育所、保育関係学会で、「保育の質」を向上させることが理論と実践の研究課題となっています。この動きはすでに一九九〇年代から欧米を中心に進められています。当初は保育条件の改善のための数量的な研究で、その後、保育実践の質の向上の追究に焦点が移りました。

一九九五年八月、横浜で開催されたOMEP（オメップ）（世界幼児教育・保育機構）世界大会のシンポジウムで、「保育の質とカリキュラム」が討議され、日本でも保育内容の質の向上に関心が向けられるようになりました。本二〇一〇年六月には、第十三回OECD（経済協力開発機構）セミナーが東京で開催され、「保育者の専門性と園組織運営の質の向上」が討議されました。二十三か国から二百名ほどの参加がありました。

二〇〇九年四月、新幼稚園教育要領・保育所保育指針が施行され、幼稚園・保育所で保育の「質の向上」のために、「保育の振り返り」として「自己評価」の取り組みが、各地、各園で始められています。

たとえば、これまでの保育界にある「させる保育」の流れを変え、「子どもの心を育てる保育」の流れをつくり出すことを目的とし、実践を振り返る「エピソード記述」を導入した方法があります（鯨岡峻・鯨岡和子『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房　二〇〇九年）。この「エピソード記述」は、一人ひとりの子どもを見て、子どもの気持ちに共感し、自分自身の行動についての振り返りがあり、大切な取り組みであることに気づかされます。

特に、学生に一人ひとりの子どもの様子を把握させるため、ビデオを使用して、けんか、給食、あそびなど日常よく見られる三分ほどの場面を書き取るよう指導している筆者には、「エピソード記述」は興味のある手法です。ちなみに筆者は学生に、ちょうど演劇で使用する脚本のように書くことを課しています。この活動が、保育学生の子どもを見る目を形成させる第一歩となり、保育職に就いてからの「エピソード記述」の活動につながることを期待しているからです。その上で、筆者は、保育者の「保育実践の質」を向上させる視座から、「エ

ピソード記述」の次の段階に進むことがいま求められていると考えています。

それは、まず、保育者自身が「保育は楽しい」と実感できることです。さらに、「子どもを真ん中におき、同僚と共に子どもを信頼し、子どもの発達を確信した時の喜び」、「子どもと保育者との共同作業の緊張感」を体感できることです。それらのことがわかると共に、さらに質の高い保育実践を展開させるための一つの方法として、先達の保育実践とその記録に学ぶという提案をしたいと思います。

すでに、日本には戦前から優れた実践とそれらを記録した雑誌『幼児の教育』や『保育問題研究』の復刻版（白石書店）があり、ここから学ぶことができます。文字だけでなく16ミリフィルムに残された「ある保姆の記録」もあります。これは戦前の「保育問題研究会」のモデル実験保育所として建てられた戸越保育所の記録です。このフィルムは保育内容・方法の実際と共に、後に日本保育学会会長になられた山下俊郎氏が親に講義をし、保育者との共同研究をしている様子を見ることができます。また、親が作っている「母親新聞」の様子も記録され、今日の保育活動の原点を見る思いがします。この記録は、一九八〇年

六月二十五日、ＮＨＫ教育番組で「昭和回顧　ある保育所の記録」として放映されました。

戦後になり、多くの貴重な実践記録が出されました。戦前の「保育問題研究会」で保育者と共に共同研究を進めた三木安正氏の編著『年間保育計画』（フレーベル館）が一九五九年に出版されました。同書は、多くの保育者に長い期間、実践を考える際の「バイブル」として読み継がれていきました。

保育者の書いた実践記録として、生活綴り方の教育実践から学んだ岸和子著『幼児時代』（麦書房　一九五七年）があります。これは、一人ひとりの子どもと共感し、保育者の子どもたちへの願いが書かれ、今日もなお学ぶことが多くあります。その後、単行本や雑誌などに掲載された実践記録は多く出されています。宍戸健夫ほか編集『保育実践のまなざし　戦後保育実践記録の六〇年』（かもがわ出版　二〇一〇年）は、単行本の実践記録を手際よく紹介しています。

多くの実践記録を読み、職場や学校で討論し、その成果を自分の実践に活かし、そのことが保育や「保育実践の質の向上」につなげることができたら、と保育者や保育学生に期待するこのごろです。

（日本福祉大学特任教授）

特集

いま、倉橋と出会う 10

倉橋惣三（一八八二―一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問い直す機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

子どもの心のはだ

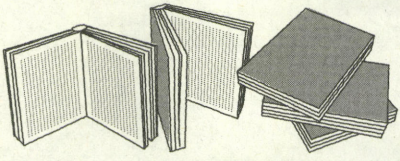
どの子の手を握ってみても、頬を撫でてみても、かわりなきは、そのはだのやわらかさである。なかには、随分よごれているのがあっても、やっぱり、やわらかい。子どもの心のはだも同じである。

それにしても、われわれ大人の心のはだのなんとあれていることか。自省に洗われ、道徳に彩られ、作法に塗られてはいても、心の地はだのなんと粗くなっていることか。時には自省と道徳と作法とでかえっておしろいやけがして、恐ろしい程がさがさになってさえいる。

子どものやわらかい手を握り、滑らかな頬を撫でる毎に、いつも思わせられるのは、さぞ、ざらざらした心地悪しさを感じさせていることだろうということである。

それは、まあ、ゆるして貰おう。恐るるのは、心のはだの触れあいだ。子どもの、あのやわらかい心のはだに、われわれの此のがさがさした心のはだで触れることだ。

倉橋惣三文庫3『育ての心（上）』フレーベル館　二〇〇八年　p. 25



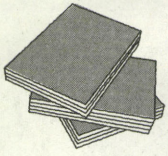
触れ合いの奥で

土屋とく

手と手が触れ合った時、互いの間に流れる何かがある。幼い者に備わっている特性は、澄んだ瞳・小さく・柔らかくきめ細かいみずみずしい肌・行動の活き活きしさであろう。園児たちに常に慈しみのまなざしを注いでいる倉橋は、鋭敏な感覚をもって、皮膚を通しての交流の中で「大人」から図らずも与えてしまう粗い刺激が、子どもにどのような影響を与えているかに思いを馳せる。

若さの対比は老成であり、経験を積み円熟することを、――心の地はだのなんと粗くなっていることか。時には自省と道徳と作法とでかえっておしろいやけがして、恐ろしい程がさがさになってさえいる――さぞ心のはだの触れ合いに心地悪しさを感じているだろう……と、図らずも子どもを傷つけ、損なう恐れが無きにしもあらずではないかと憂いている。この文は、外と内=心と心の関係を説き、多くの教えを含んでいると考えられる。『育ての心』には肌について似た記述が見える。それは「とげ」と題して、――わたしたちの目にとげはないか。言葉に、気分にとげはないか。もとより自分で心づかぬ時のことである。……もとより瞬間のことである。しかし、とげはいつでもちょっとさすものであ

り、その一と突きが、もう相手の皮膚を破っているものである。幼児の心の膚は、その軟らかい皮膚よりも軟らかい。わたしたちにほんの小さな一つのとげがあっても、直ぐいため傷つけずに措くまい――と。全著作の中に、こうした明敏な感性を物語る言葉が多い。

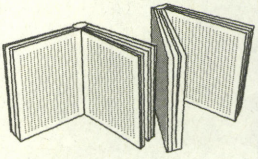


こまやかさ

育てる者は、五感―視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚―のすべてを働かせて子どもの状況をとらえ、どう対処すべきかを考える。動きからその時その時の奥にあるものを察知して、最も適切な仕方を瞬時に選び取って行動に移すものであろう（場合によっては何も手を下さないことも含めて……）。それは幼い者に対していつも敏感であると同時に柔軟な思考を働かせて、きめ細かく心を配る姿勢があるかどうかにかかっているのである。

倉橋が『幼稚園真諦』の中で、先生の役目は、子どもの生活に対して、心遣いのこまやかさということ、常に気が利いていることと説き、『戦後小編』でも、望ましい保育者の条件として、「気がつく」「手が届く」「行き渡る」こと、つまり、口・手・足・目の行き渡る前の心の行き渡りがなくてはならないと述べている。そして就学前の教育は一般の教育に比して味の教育であり、「実際家」の外（ほか）にはわからぬ、人には言えぬ楽しみがあるともいう。

これらはまさに充分にかみしめ味わうべきものであろう。いつか〝一度深く保育にかかわったことのある者は、一生子どもに関することから離れられない〟と昔から囁（ささや）かれていると聞いたが、このようなところに密接なつながりがあるのかもしれない。



磨かれる感性

感度の良しあしは個人によって異なる。同じ体験をしても、ある人は少しの動きにも反応するが、かなり時を要してようやく気づいたり、淡い印象のままに過ごしてしまう人もいる。それはおそらく生得的なものでもあろうが、保育者の資質として感性は必須であり要諦に違いない。しかし誰にも備えられている諸感覚は、後天的な環境と努力によって良い方向に導かれるはずであると思う。

初めて母親になった時、子どもの可愛さに触発され、慈しみの感情が内から自然に生じて、微妙な動きも敏感に察知する力が目覚めてくるものである。保育者も子どもと親しく交わる中で、また自分を高めようとする意欲があれば、おのずから良い感性は開発され育てられていくのではないか。さらに、優れた感性は教えられるものではなく自分自身で磨くものでもあろう。

こよなく芸術を愛する倉橋は、学生に一級の芸術に接することをたびたび勧めていたという。教え子たちも機会をとらえては美術館に音楽会に歌舞伎座に足を運ぶことを生涯の課題と楽しみにしたと、後年優れた指導者となられた方々から伺っている。

（保育を深める会代表）

参考文献　『倉橋惣三選集』（全五巻）　フレーベル館
『倉橋惣三「保育法」講義録』菊池ふじの監修　土屋とく編　フレーベル館　一九九〇年

「子どもの心のはだ」によせて

下山田裕彦

久しぶりに倉橋惣三の文章を読んだ。われを忘れて倉橋を読んだ30代、40代のころが鮮明に思い出される。当時、私は倉橋と同時に、矢内原忠雄全集にも夢中になっていた。

学生時代、矢内原の聖書講義を聴いた私は、倉橋から学ぶ幼児教育の思想と矢内原の福音信仰に基づく人間理解を重ね合わせて思索を巡らせた。両者は、時に火花を散らしながら、私のその後の歩みを導き、方向づけてくれた。

倉橋について文章も書き、学会発表もして、批判も、恥ずかしながらしてきた。三十年以上の年月が流れ、幼児の教育に携わる研究者としての最晩年を迎え、いま、倉橋の人と思想について、再検討を迫られているようである。

倉橋の幼な子に対する見方は、やわらかく、温かく、詩のような讃歌である。

私はいま、勤めている大学の附属幼稚園を、毎週

一回訪れて、子どもの傍で過ごす時を、この上なく楽しみにしている。

学会などで留守した後のこと、園に行くと、五歳児の女児が笑顔で、そして、少しすました声で、声をかけてくれた。

「下山田先生、おひさしぶりですね」。

この大人びたあいさつに、少々ぽっとして、「本当におひさしぶりですね」と、このレディに応えた時、「子どもの心のはだ」の文章が思い出された。

幼稚園の子どもたちは、おしゃまさんでもはにかみやさんでも、元気よすぎてやんちゃでも、みな、一様に愛らしい。やわらかな肌と、人を信頼する清らかな瞳をもっている。

'若き日の倉橋は、内村鑑三の名著『後世への最大遺物』を読んで感激し、内村のもとで熱心に聖書を学び、信仰を継承し、師・内村からも周りからも、愛弟子と称された。

信仰者・倉橋の子ども理解は、次の聖書の箇所に原点をもつのではなかろうか。

「イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。それを見てイエスは憤り、彼らに言われた。

『幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない』。

そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。」

（マルコによる福音書　10章13節～16節）

そしてこのメッセージには、倉橋が、幼な子の心に向かい合って、恥じ入り、自らを戒めた大人の心がある。旧態依然として、道徳や作法を金科玉条にしている、大人、とりわけ、子どもを導き、育てる、先生と呼ばれる私たち大人は襟を正さざるを得ない。

さらに若き倉橋に感化を与えたのは、ペスタロッチの教育思想であった。社会からはじき出されて、恵まれない貧しい子どもたちの教育に生涯を捧げたペスタロッチは、挫折とかなしみ多き人であった。彼の処女作『隠者の夕暮』の副題には次のような言葉が付与されている。

「神の親ごころ、人間の子ごころ。
君主の親ごころ、国民の子ごころ。
それがすべてのしあわせのもと。[注1]」

『幼児の教育』第一〇九巻第七号には、このペスタロッチの思想を平易な言葉で石塚美穂子氏が見事に浮き上がらせている。

ペスタロッチの教育思想は、倉橋を経て、今日まで細い糸のように継承されている、との思いに満たされる。

ペスタロッチにせよ、倉橋にせよ、いまは、現代という子どもをとりまく社会の中において、再検討され、子どもの幸せな成長のため益となっていかなくてはならないだろう。

水曜日の朝、附属幼稚園に出かけていった。三歳児のM君が、一人で壁によりかかって、何をするでもなくじっとこちらを見ていた。言葉が少々遅く、友達の中にとけこめない彼に私はずっと同情してい

た。ゆっくりと彼の方に近づいていってしばらく彼の横にしゃがみこんでいた。そして「あそぼう！」と声をかけ手を差し出すとM君はニコッと笑った。この瞬間、私たちの距離は近くなり滑らかになった。手をつないで、ゆっくりゆっくり保育室などをのぞきこんで歩いた。M君は不安がなくなった、穏やかな表情であった。彼の心のはだのやわらかさに触れた思いで忘れられない。それ以来、私の来るのを待っていてくれ、言葉もかけてくれるようになった。

さらに、一番長く奉職した静岡大学時代にも、やはり附属幼稚園で実習をさせてもらった。

若かった当時の私は、新設の幼児教育教室を何とかよいものにしたいと一生懸命であった。幼稚園に九時に登園し、すぐに庭に出て子どもたちと遊んだ。男児たちの人気の遊びは野球であった。

私はピッチャーで、子どもが打てるようにゆるい球を投げるのが常だった。それでもしかし、なかなか打てなかった。そんな中に一人だけ、とび抜けてうまいK君がいた。打てないと「チップだね」とねばって打つ。ある日、彼がバッターに立った時、私は思いきってきつい球を投げた。K君は三振に打ちとられた。怒ったK君は私に文句を言った後、突然私をどなった。「何だ、おまえなんか先生じゃないだろう、帰れ！」と。私も負けずに「いいよ、帰るよ」とむきになって言い返したのである。いつもみんなの頂点に立っていたK君のプライドはすっかり傷ついてしまった。若かったとはいえ、まことに恥じ入るばかりである。

子どもにかかわる保育者は、どんな時にも、やわらかな子どもの心を傷つけてはならない。

また、子どもの心のはだ、について忘れられないA君との思い出もある。

昭和四〇（一九六五）年、家庭をもったばかりのころ、茨城県の海沿いの町から東京の大学に通っていた。総じてみな貧しい時代であった。A君一家は浜辺の掘っ立て小屋のような所に、子だくさんの家族で住んでいた。ドラム缶の風呂に流木を燃やして入っていて、A君は何の用もなくても、通りがかり、という風情でわが家の小さな縁側に顔を見せた。破れたランニングシャツを着て、腕や両下肢には皮膚病か、虫に刺されたのか、ひどいおできがたくさんあった。妻が消毒して軟こうを塗ってやり、おやつを一緒に食べたりした。スイカを緑の皮を薄く残すまで食べた姿が忘れられない。毎夏、スイカの季節がくるたび、A君、その後どうしたろうかと話題にした。

とても、やわらかい肌、などではなかった。しかし、黒目がちで、はにかみながら、うれしそうに、おいしそうに食べる彼の心のはだはやわらかく、こちらにも幸せな心持ちをわけてくれた。

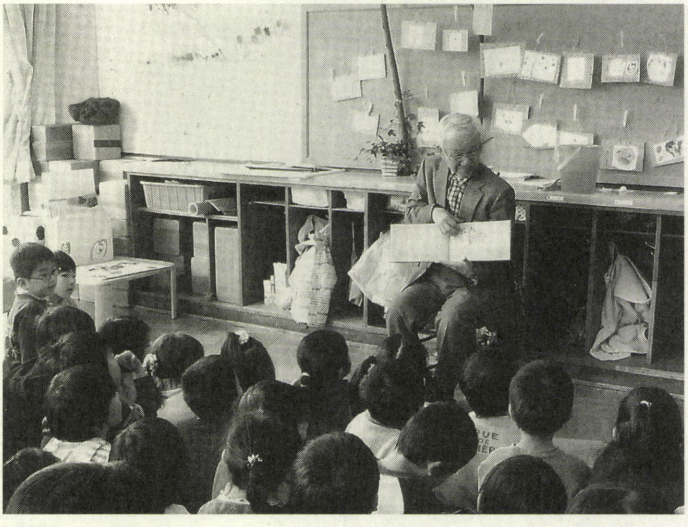
倉橋は、後半では、それにしても、……と、大人の心に言及している。粗い、おしろいやけのした心で、子どものやわらかな心に接してよいのだろうか、との問いを出している。

倉橋が信仰の師と仰いだ内村鑑三は、人間の内奥にひそむ暗さ・罪について鋭く追求した。

そして、こんな短い詩を残している。

「さらばわれは何なるか
夜暗くして泣く赤子
光ほしさになく赤子
泣くよりほかにことばなし」[注2]

やわらかな子どもの心に、暗い内面をもつ大人、保育者がかかわっていくことの厳粛さに畏れざるを



▲附属幼稚園の子どもたちと

得ない。

それでも私たちは、子どものやわらかさ、清さ、明るさに励まされ、軌を正して保育の営みを続けていく。

育ちゆく子どもに希望を見いだして、子どもの幸せを保障するために、働いていきたいと思う。来週の水曜日に幼稚園で読む絵本を選び、声を出して読む練習をしながら、子どもたちの顔を思い浮かべて、私は幸せな思いに満たされるのである。

（北陸学院大学教授）

注（引用文献）

1　ペスタロッチ『隠者の夕暮』（梅根悟訳『政治と教育』明治図書出版　一九八四年　所収）

2　山本泰次郎『内村鑑三・信仰・生涯・友情』東海大学出版会　一九六六年

心の覆い――命を育むもの

白井貴之

仕事場である鍼灸整体院に向かう朝の道、バイクに乗って信号待ちしている私に、歩道にいた三歳くらいの男の子が「おはよう！」と言って手を振ってくれました。私はすぐに「おはよう」と言って手を振り返しました。5秒もかからないやり取りの中で、私の心はとても和んだのですが、見ず知らずの大人に対しての、この子の無邪気な声かけは、いったい何なのでしょうか。

幼児にはよくあること、と言ってしまえばそれまでです。しかし、無邪気なひと言に、つい応えている私がいるのも確かです。このことについて、私の仕事に絡めて見てみたいと思います。

生き生きしさ

鍼灸整体という仕事柄、私は目に見えないものに触れる機会が多くあります。目に見えないといっても、それは神仏とか幽霊とか、また最近の言葉では「オーラ」とかいうものを指しているのではありま

せん。ここでいうのは、その人のもつ「生き生きしさ」のことです。

この「生き生きしさ」というのは、抽象的なものです。目に見える形のあるものではありません。ただそれは、息遣い、声の出し方、目つき、肌の色つや、身のこなしなどに現れています。いわゆる「元気な人」は、弾むような、広がるような、安定した様子が見て取れます。そういう点で、幼児というのは、たいてい溢れるほどの「生き生きしさ」をもっています。ところが多くの場合、大人になると「生き生きしさ」は減っていくようです。

鍼灸整体という、体の整えをする術から見ると、体調不良の多くは「エネルギー不足」が原因となっています。エネルギーに満ちていれば、病気やけがにはなりにくいものです。この場合にエネルギーというのは、いわゆるカロリーなどで表されるものだけではありません。もっと根本的な、生命を生かす力ということです。言い換えれば「生命力＝生き生きしさ」となるでしょうか。

人間は、食べものを摂ることによって生きる力を得ていますが、その食べ物のおおもとは、植物たちが太陽光や水や空気などを取り入れてつくり上げたものです。つまり、生きる力の源は、太陽光や水や空気だといえます。その力が外と内をつなぎ、人の中を流れることで、人は生きられます。生命力を高めるためには、自然や人とのつながりがとても大事だということです。そして、生物同士の「食物連鎖」というかかわりを超えた、「命のつながり」がここには含まれています。

自分と他人

人は成長と共に、自分と他人の区別をつけていきます。人との間に、時には溝を掘り、時には塀をつくります。それはまるで「自分と人とは異なるもの

だ」ということを確かめていくかのようです。この境界をつくり上げるという振る舞いには、意識せずに行っていることがたくさんあります。たとえば電車やバスなどで座席に腰掛ける時、すいている場合にはたいてい、人との間に距離を置きます。もしもすいているのにすぐ隣に腰掛けたら、相手は怪訝な顔をするか、警戒して席を移すかすることでしょう。

人と人が共に生きていく上では、「間」というものが大切なものになっていきます。それは自分と他人の境目を強く、はっきりとさせていくことにもなります。この、自他の区別をつけるということは、きっと成長の過程で大切なことなのでしょう。「分別がつく」という言葉が肯定的に使われることからもそれがわかります。自分というものを確立してこそ「大人」といえます。

しかし、それによって失われるものもあります。年齢を重ねると、知識や知恵を得ていきますが、それと共に、子どものころはつながっていた世界とも切り離されていくのではないかと私は思います。

世界と私は一つ

小さな子どもというのは、言ってみれば「境界が薄い」人です。そのような子どもというのは、すべてとつながっているともいえるでしょう。あるいは、どこまでも広がっている存在ともいえます。そこでは子ども自身は何にでもなれると思っているかもしれませんし、何でもできると感じているかもしれません。世界と溶け合って、不安なく、安らぎに満ちて生きているようにも見えます。

そういう点で、冒頭に挙げた「手を振った子ども」は、境界が薄く、私との間に溝や塀はなかったようです。つまり、「自他の区別をしていない」というこ

とです。その分け隔てのない子どもの振る舞いに、私の中で何かが起こり、心が和らぐことになったのです。おそらく、自他の区別をつけない子どもに触れることで、生命を存在させる力とのつながりが、私の中にできたのでしょう。何十年も前に私が見失ったそのつながりを、子どもは呼び覚ましてくれました。

柔らかな覆い

ただ一方で、境目の薄い世界、あるいは境目のない世界は、生々しい世界でもあることでしょう。全身を耳にして聞くという表現がありますが、まさにその状態だといえます。周りで起こっていることが、まるで津波のように押し寄せてきます。たとえ大人であっても、敏感な人はその波に揺さぶられ、時には体調を崩します。そういう時、大人は自分から別の場に行くか、境界をより強くしていきます。

しかし、子どもの場合、居場所を変えるのは難しいことですし、揺さぶられているということさえ認識できていないかもしれません。

境界の薄い世界で生きる子どもには、大人の配慮が求められるのだと私は思います。言ってみれば、「心の覆い」のようなもので、強すぎる刺激から守ってあげるのです。それは、分別がある大人にしかできないことです。しかし、同時に難しいことでもあります。大人の分別をそのまま子どもの世界に持ち込み、固い塀をつくって守るのは子どもの生命力を阻害します。「子どもの心のはだ」を柔らかく包み込む衣（ころも）を掛けてあげられたら、子どもは安心して、生命力を思いきり発揮することができるでしょう。そしてまた成長を見守る大人も、「柔らかな覆い」や「柔らかな境界線」を意識することで、「生き生きしさ」を取り戻していけるのではないでしょうか。

（鍼灸整体師　気功会主宰）

肌が触れて感じる温かさ

山下紗織

四年前、初めていずみナーサリー[注1]を訪れた時のことです。午睡明けの0歳の女の子がハイハイをしてやってきて、正座をしていた私のひざの上に、ひとつずつ手を置きました。その小さな手のあまりのやわらかさに、硬くなっていた私の身体はふっと緩み、ただただ静かな感動が込み上げてきました。忘れることのできない、子どもの肌のやわらかさとの出合いです。

倉橋惣三は、手や頬（ほお）と同じようにやわらかい子どもの「心のはだ」に、がさがさに荒れた大人の心のはだで触れることを恐れると言います。私は月に数回、ボランティアや保育お姉さん[注2]を通して子どもたちの生活の中に身を置いていますが、子どもにじっと見つめられる時、その奥にある子どもの心のはだのやわらかさと、同時に、子どもを見つめる自分の粗い心のはだを、ひしと感じることがあります。涙をいっぱい溜（た）めた目、驚きに見開かれた目、真剣に見据える目。保育を終えると、そんな子どもの表情を思い出しては、ああ申し訳なかったと思ったり、あれでよかったのかと思い巡らしたりすることがあ

ります。それは、子どものやわらかい心のはだに触れる自分の粗い心を、省みているといえるかもしれません。

昨年の秋、一歳半のYの母親に、保育お姉さんを頼まれました。ナーサリー閉所後の数十分間、Yを連れて学内で遊んで待っていてくれないか、ということでした。学内でYと二人で過ごすのは久しぶりでした。ナーサリーの閉所時間が近づくと、Yはお迎えを気にし、そわそわし始めました。その日、Yの母親もナーサリーの保育士さんも、事前に「今日は、さおちゃん（Yが私を呼ぶ呼び方）の日だよ」と話してくれていましたが、やはりYは母親のお迎えを待っているようでした。

閉所時間になり、私は「じゃあYちゃん、さおちゃんと一緒にお散歩に行こっか。今日はお魚いるかな」と言いました。Yはお気に入りのカエルのバッグをしっかりと握り、口元にわずかな笑みを浮かべてうなずくと、私の手を握りました。主任保育士のK先生に見送られ、私とYはナーサリーを後にしました。辺りはもうすっかり暗くなっていました。風はひんやりと冷たく、空もどんより曇っていました。

Yは、いつもは「自分で」と一人で歩くのですが、この日はすぐに両手を差し出し、抱っこのポーズ。「Yちゃん、びよーん」と言ってYを抱き上げ、Yとよく一緒に歩いたルートを通って学内のベビールームに向かいました。いつもと同じように、エレベーターに乗ったり、猫を探したり、池の鯉を見たりしながら歩いていると、私の腕の中にいるYの表情と身体が、次第にこわばっていくのがわかりました。そういえば、こんな暗い中を二人で歩くのは今日が初めてだ、見慣れない風景に、ひんやりした空気に、Yは不安を感じているかもしれない、ただでさえ今日はママのお迎えを待っているようだったのに……と、配慮が足りなかったことを申し訳なく思いながら、Yに「大丈夫よ」などと声をかけ、少しは明る

く暖かいベビールームへと足を速めました。

ベビールームに着くと、いつもはすぐに遊び始めるYが、こわばった表情のまま、私の顔をじーっと見つめて立ちすくんでいました。閉所間際に何度もドアを見つめ、バッグの持ち手をぎゅっと握り、両手で抱っこを求めたYの姿が頭をよぎり、暗く少し冷たい空気をまだ肌に感じながら、「ママがよかったよね、ごめんね」という言葉が私の口からこぼれました。途端に、Yは堰を切ったようにわーんと泣き始めました。ああ申し訳なかったと思いながら、大丈夫、大丈夫、と抱きしめると、Yは泣きながらも身体を私に預け、その冷たく滑らかな頬が私の頬にくっつきました。

そこに「Y！」と母親が迎えに来ました。するとYは「ママ！」と言って母親のもとへ行った後、すぐにそこから離れて満面の笑みでベビールームに置いてあった絵本を手に取りました。その様子に、母親も私も、思わず顔を見合わせ笑ってしまいました。

いま、この時のことを思い出すと、ただ大人の粗い心を省みていた時とは少し異なる思いが浮かんできます。母親が迎えに来るまでのYの心のはだは、その頬と同じように冷たくなっていたかもしれません。私のせいで……と、いっそうがさがさした私の心のはだで、Yの心のはだは心地悪かったかもしれません。しかし、少し経ったいま思うのは、少し心のはだが荒れたり冷たくなったりしてしまっても、それでも「大丈夫」と思える、肌の触れ合いがあるのではないか、ということです。泣きながらも、あらがうのではなく身体を寄せてきたYの冷たい頬と、けろりとしたようなYの表情を思い出す時、そこに、少しだけでも温かい私の頬があってよかった、と思うのです。何だか心がざわざわするけれど、でもきっと大丈夫、と思えるような存在に、私はなれていただろうか、と思うのです。

子どもたちは、育ちの中で、きっとさまざまにそのやわらかな心のはだに刺激を受けて生きていくと

思います。そんな時、その肌の荒れや冷えが少し癒えたり温かくなったりするまで、大丈夫、大丈夫、と願いながらいてくれる存在が、子どもたちのそばにあってくれればいいなと思います。

「子どもの心のはだ」を著した当時の倉橋に思いを馳せると、「自省」「道徳」「作法」に彩られた大人と子どもの関係に危惧を感じ、大人の心を「がさがさ」「粗い」と表現しながら、一人の保育者として、どう子どもと共にいることができるか、思い巡らしていたのかもしれないと思えてきます。しかし、目の前の子どもの傍には、ただ一人の保育者だけでなく、多くの人やものがあります。そして、時にそんな大人の心が「自省」や「作法」などで、がさがさになってしまったとしても、子どもの幸せを願うその心はきっと温かいに違いなく、その温かさが子どもの心にとっては、ありがたいものとなってくれるのではないでしょうか……。

このことは、子どもだけでなく、私(大人)にとっても同じことかもしれません。普段の生活の中でも、保育をしている時でも、自らの心のはだが、がさがさしていることに気づき、反省したり落ち込んだりすることがあります。でも、きっとそれでも大丈夫、と思えるのは、そんなありがたい人やいろいろなものが、自分を受け止めてくれていると感じられるからではないかと思います。

たくさんの温かい人たちに囲まれた後の帰り道、そんなことを考えました。

(お茶の水女子大学大学院生)

注

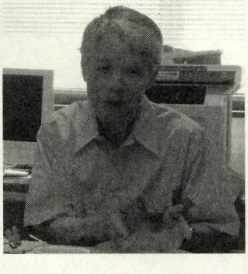
1 大学附属の保育所。生後六か月〜三歳未満の子どもが入所している。学生ボランティアの受け入れをしており、筆者は二〇〇六年の十月からボランティアとして、週に一度、保育に入らせていただいている。

2 いずみナーサリーに通所する子どもを、主に開室時間前後に保育する学生のベビーシッター(「保育お姉さん」)。筆者は二〇〇七年四月から今日までの間、十名ほどの子どもの保育お姉さんとなっている。

インタビュー

倉橋惣三と私(1)

語り手　森上　史朗
聞き手　浜口　順子
佐治由美子



●倉橋惣三研究を始めたきっかけ

浜口　森上先生は、いまさらご紹介するまでもなく、幼児保育・教育の原理や思想、乳幼児の発達や保育方法などに関する数多くの論文・著作を世に出され、保育や保育者養成の現場に大きな影響を与えてこられました。一方で、保育史という領域のご研究も、先生の主要な業績として忘れることができません。『児童中心主義の保育』（教育出版）、『子供に生きた人・倉橋惣三―その生涯・思想・保育・教育』（フレーベル館）など、貴重な史料を駆使されたご著書がおありです。さて本日は「いま、倉橋と出会う」という特集テーマに沿っていろいろとお話をうかがいたいのですが、そもそも森上先生にとって倉橋惣三との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

森上　私は、昭和六（一九三一）年岡山生まれですが、東京教育大学（現在の筑波大学）に入ると心理学を学びました。卒業して北海道の教育研究所に勤め、障害児の研究をしました。当時は、保育科というのは、いわゆる、いまでいう保育士や幼稚園教諭を養成する所で、東洋英和や聖和などの伝統的な養成施設があるぐらいで、児童学科にしても、お茶の水女子大学（以下、お茶大）や日本女子大学だけだったわけですから、幼児教育だけを専門にやるという人

はあまりいなかった時代です。私が最初に勤めた大妻女子大学で、平井信義先生とご一緒することができました。そうでなかったら、あるいは一生、倉橋に出会わないで終わっていたかもしれません。平井先生がお茶大を辞められて、大妻に児童学科が創設され、学科長として行かれた時ですね。

佐治　それはいつごろでしょうか。

森上　昭和四十（一九六五）年ぐらいですね。世間で幼児教育を教えている先生は教育学や心理学出身の方が多かったですし、アメリカからディシプリンカリキュラムといわれる、いわゆる構造主義のカリキュラムが入ってきて、それに関心が向いていた時代です。その中で倉橋先生の伝統が消えずにずっと続いてきたのは、津守真先生、平井先生、もう一人は坂元彦太郎先生の功績ですね。平井先生は本当に倉橋先生に傾倒されていました。オーストリアの留学から帰られてから、教員同士で「先生」って言うのはやめようなんておっしゃっていたんですね。

浜口　オーストリアの大学ではそういう呼び方をしなかったのでしょうか。

森上　ええ、「〇〇さん」が一般的で、「先生」と言い合うのは日本だけの伝統だからやめようなんてことをおっしゃった。だから僕らが時々「平井先生」とお呼びすると怒られたりしていたんですけれど、平井先生も「倉橋先生」って言うんですよ（笑）。

佐治　そこだけは。

森上　そのことを僕たちが言うと「倉橋先生は別だ」って言われるんです（笑）。平井先生がよく引用されていた『育ての心』『幼稚園真諦』『幼稚園雑草』（フレーベル館）などの倉橋の著書を読むと胸にずしんときました。僕は本当は心理学は途中でやめようと思うくらい嫌いだったんです。それは、当時はどちらかというと実験心理学のようなものが主流でしたので、子どものこととか臨床心理学なんかをやりたいなどと言うと、そんなのは学問じゃないとえらくしかられたりした時代だったものですから。倉橋先生のような、子どもとじかに接してその自分が接した感覚から、子どものこととか保育のことを

語っていこうというのには、本当にびっくりしました。

佐治　それで、倉橋惣三の研究を始めようと？

森上　そうですね。日本保育学会にはかなり前から入っているんですが、当時は保育学会でも倉橋の研究をする人は非常に少なかった。当時、倉橋先生についてのシンポジウムを津守先生が中心になって開かれました。確かその席で、韓国李花女子大学の李相琴さん（保育研究者。日本で学位を取得した）が、「不思議でしょうがないことがある」っておっしゃるんですよ。「あれだけ素晴らしい実績と研究を積まれた倉橋惣三という人の研究がほとんどされていない。研究書が一冊もないということに、本当に私はびっくりする」と。それで、そのころから、私の手に負えるかどうかわからないけれどやってみようと思いました。

　そのころちょうどもう一つ転機がありまして、大妻に五年間いた後、私自身も進んで行く気はなかったんですが、三年でいいと言われ（結局五年いましたが）、文部省（現在の文部科学省）に幼児教育調査官として行くことになりまして、これは大学と違ってある種刑務所のように自由のない大変な場所だと思いましたけれども、そういう中で唯一の救いが、時々坂元彦太郎先生にお会いできることだったんですね。坂元先生は、学校教育法（一九四七年）とか保育要領（一九四八年）とか幼稚園教育要領（一九五六年）とか、そういうものを作っていく過程でどれだけ倉橋先生のアドバイスや考え方の影響を受けたかわからないということでした。坂元先生はいろいろと倉橋先生と接して窓口を開いていかれたということを感じました。

浜口　坂元先生は行政の中にいらして、戦後の幼稚園にかかわる重要な法律や公的文書に、倉橋の思想を反映していったということですね。

森上　学校教育法の第一条で、小・中・高・大学などの学校と並んで幼稚園を「学校」に入れるかどうかが論議になりました。坂元先生はここで幼稚園を「学校」に位置付けないと、幼児教育の専門性を誰も評価しないと主張しておられたんですね。ただ、

保育関係者は「学校」ということに対しては反対が強かった。倉橋先生も最初はやはりあまり賛成ではなかった。けれども、やはり坂元先生とのいろいろのやりとりの中で、「小・中・高・大学及び幼稚園」としての学校とするのだったら、いまは必要かもしれないとおっしゃったとか、そんなことがあったようです。

浜口　「幼稚園」という呼び名は残りました。

森上　ええ。倉橋先生が「幼稚園」という名称は絶対に残してもらわないといけないと。倉橋先生の著書『フレーベル』の中に出てきますね。「園」でないといけない、「幼児学校」ではなくてね。

●いま、倉橋とどう出会うか

浜口　今度は、「いま、倉橋とどう出会う」のかということなのですが、どうお考えになりますか？

森上　倉橋先生の文章の中に「保育における新と真」ということが出てくるものがあります。あれは非常に重要なキーワードになると思っております。新ということは、いまの子どもが置かれている状況を考えて、幼児教育の中での強調点とか、あるいは、変えていかなければならないというようなこともある。しかし倉橋先生は、変わるものの底にあって変わらないトゥルース（真実）があるということを言っていらっしゃる。そういうことは、幼稚園教育要領が作られる過程を見てきても思うことです。幼稚園教育要領といったものを作る時にはある意味では戦いなんですね。われわれの仲間内はいいんですよ。でも、むしろ学校教育に近づけなきゃいけないと思っている人たちが結構いるわけですね。そういう人たちとの戦いなわけです。そういう中でどうしても守っていかなくてはいけない幼児教育の真、ということがある。昭和三十一（一九五六）年の幼稚園教育要領の中でも少しは守られていたが、あの時はどちらかというと学校寄りだった。学校サイドの人たちがリーダーシップを取りましたから。

浜口　最初の教育要領ですね。

森上　次の昭和三十九（一九六四）年の改訂の時は

坂元先生が頑張って変えようとしたけれども、変え切れなかった部分があった。平成元（一九八九）年の改訂の時には、わりあい幼稚園のことがわかる人が多かった。「幼稚園教育の基本」という、第一章総則の中に書いてあることは、言葉は違いますがニュアンスとしては、倉橋が大正五（一九一六）年に「幼児教育の特色」という題目で京阪神連合保育会で講演された内容と、そっくりなんですね。すなわち学校教育とは違う（一）自発的、（二）相互的、（三）具体的・総合的、（四）情緒的という特色、そういうことに気づかれていた。

やはりある意味では、倉橋の考えがいまに続いてきていることですね。情緒的ということに関しては、わりあい批判する人が多いですが、私はそれはすごいことだというふうに思うんです。別の言葉で言えば内面性ということなんですね。

浜口　子どもの内面性に注目するというのは当時としてはとても新しいことだったんでしょうね。一貫してそれが平成元年の教育要領にまで流れている。

森上　ですから基本的な考え方というのは、本当のものを追求していくとそこに到達するわけです。そういうものがあるんだろうなと思うんです。ただし、細かい点になると、どう伝えられていくのか。

倉橋先生の周辺で直接保育をされた人たち、つまりお茶大やその前身の女高師（東京女子高等師範学校）で学んで保育者になられた人たちの美登利会の方々がある意味では倉橋の保育を支えてこられたともいえます。けれども、美登利会だけであったら消えていたんではないかと思います。ある意味ではサロン的というか、そういう形では残っていたかもしれませんが。

いま、保育者養成の中でも倉橋の理論というのは欠かせないものだというふうに位置付けられていますが、こういう形で残ったのは、先ほど挙げた三人の方のお力が大きかったと。私自身、この方々の影響を受けていますし、この方々がいなかったら倉橋惣三の考え方は今日まで伝わってこなかったんではないかと思います。

浜口　理論を実現していく手だてについてはどうでしょうか。どう引き継いでいくのか。

森上　私は「自己充実」というのも非常におもしろい考え方だと思っています。単なる「充実感」ではなくて「自己充実」。これは子ども側の充実ですから、大人から見て充実しているかということではないということ。でも放っておいてはいけないんだということで「充実指導」へ。さらに、「誘導」へということです。ただ、これは津守真先生もお書きになっているんですが、ここに現代に残された課題があると、私もそう思います。いま、倉橋先生が生きておられたら、多分ここはその後の実践に即して書き直されただろうと。ただしこういうモノが出てくる当時の状況を見てみれば、その斬新さにみんなが腰を抜かさんばかりに驚いたというんですから、そういう状況の中で書かれたことに大きな意味がある。

●誘導保育と現代

森上　いま、わりあい学校教育的に考える人たちも、誘導保育というのは協同的な学びに通じると評価していますよね。

浜口　近いものがありますね。

森上　だからある意味ではそちらの方向にのみ向かうという危険性がある。もちろん私はいつも大人が正しいと言いたいのではないけれども、大人は長い間いろいろ経験もし、挫折もし、そこから立ち直ったりもしながらやってきた。それをもとにして世の中にはこんなに素晴らしい絵本があるよとか、こんな楽しいことがあるよということを子どもに提案するとか提示するとか投げかけるとか、そういうことは否定すべきことではないと思うんです。新しい形で誘導とか教導ということを考えていく必要があるのかもしれない。教導についてはほとんど倉橋先生は触れてはいらっしゃらない。

浜口　教導は、主には小学校以上のことですね。

森上　でもあれは『幼稚園真諦』の中に書いていらっしゃるから。短いですけれどね。ですから、そこの誘導とか教導というものを整理して、提案するとか

ね。ただし提案というのは無理やりになってしまう危険性があって問題があります。やはり誘導保育案だけでは詰め切れないところがあるのでしょう。

浜口　時代で大人が変わってきたという面もあるのかと。いまは、大人が主体性を発揮しないほうがよいというような、ある意味、誤解も生まれたりしていますね。一方で、プロジェクトメソッドのように、割と大人がある方向に導いていくような傾向がよしとされることもあるような気がします。

森上　そうですね。倉橋先生は、戦後の『幼稚園真諦』改訂版の中で、巻末に付いていた具体的な「水族館」などの実際指導案を示した部分を削除しています。これはプロジェクト的で単元保育、テーマ保育などに偏っていくという危険性に気づいておられたのではないかと思いますね。

平井先生は倉橋先生の影響で、徹底した現場主義でしたから、大妻では教員も週に最低一日か二日くらいは幼稚園とか保育所とか障害児の施設にべったりと入って子どもとかかわっていました。私も同じ保育所に何年間かずっと通っていましたが、そこで見ていると、やっぱり、表現が嫌いな先生というのは表現にかかわる活動が少ない。やったとしても、子どもが食いついてくるようなのは出てこないとか。長所と短所があるとは思います。運動が得意な人で子どもの気持ちのくめるような人であれば、運動的なことはやるんでしょうけれど。でも、東京都の認証保育所の中には環境が不十分で、ほとんど子どもが身体を動かさない生活をしているような所もあるんですね。そういうようなことがありますから、誘導ということが必要になる。しかし、それは短いスパンのことではないですよということを誘導保育案の中にも書いているんですね。子どもの育ちを長いスパンで見た時にどうしても考えておかなくてはいけないところだと。

浜口　保育者の特性によって、具体的な内容も違うということも踏まえていらした。とすると、新しい問題に立ち向かう時にも真なるものは変わらずあって、それが幼稚園教育要領の中にも脈々と続いてき

たということですね。

森上　僕なんかは研究者として見ているから、倉橋先生をどこかで対象化しているんですね。ところが、倉橋先生と共に生活してきた人は、平井先生もそうですけれども、とても対象化なんかはできないんですね。だから美登利会の人から、先生はよく〝倉橋惣三〟なんて呼び捨てにできますね、なんて言われたことがありました。

そこに私の反省もありますけれど、もう一つの問題があるように思うのです。『子供讃歌』（フレーベル館）の中で倉橋先生自身が、フレーベルやペスタロッチに非常に影響を受けたと言いながら、でも、それを教祖のようにしたり、神格化してはいけない、それらの人に導かれながらもその人を超えていくように努めなくてはならない、先人は方法論とか見方を提示してくれているのに過ぎないということを忘れてはいけませんよ、とかなり強い口調で書いていらっしゃる。坂元先生に言わせると、倉橋先生からじかに教えを受けた人たちには、「師は師たるべく他の存在ではあり得ない」というところがある。しかしその倉橋先生自体が、いまだったら「これはどうなのか」とか、いま問題があるというようなことを考えている。当時としてはとても大事なところだったということを、いまという状況になっていろいろなことが新しい課題として迫ってくるのです。

浜口　それが、いま、森上先生が倉橋先生と出会う時の出会い方なのですね。

森上　津守先生もおっしゃっていますが、これは私たちに残された、現代の保育に携わる者が追求していかなければならない課題であると。いまは研究者の中にも、わりあいに現場の人と一緒になって研究をしていく人が増えてきていますから、単に机の上で研究するのではなくて、倉橋の保育論と現場の実践のかかわりを追求していく必要があるのかなと思います。

（子どもと保育総合研究所代表）

浜口順子・佐治由美子（お茶の水女子大学教員）

記録・金子未希（お茶の水女子大学大学院生）

教育学者のあたふた子育て・親育ち(4)

子どもをもたない保育者の専門性とは(2)

佐久間亜紀

「佐久間先生には子どもはいないんですか?」

教育関係者の一人として仕事をしていると、しばしば、私自身に子どもがいるかどうかを尋ねられます。先月号では、まだ私に子どもがいなかったころ、この種の質問をされ、当惑した時の経験について記しました。当時の私は、「子どもがいないあなたには、教育のことはわからないのではないか」というたぐいのことを陰に日なたに言われ、女性としてだけでなく、職業人としても、存在価値を丸ごと否定されるように感じる経験を重ねていたのです。そして、それらの経験が、子どもがほしいのにできないという悲しみを、いっそう深いものにしていました。

ところがどうでしょう。いざ自分が出産して子どもを保育園に預けるようになると、私自身がふと「あの先生にはお子さんはいるのかしら」と考えているではありませんか。これは、私にとっては天と地がひっくり返るような、驚愕の経験でした。なぜ、私も含めて多くの人は、自分の子どもを見てくださる保育者に、自分の子どもがいるかどうかが気になってしまうのでしょうか。そして、子どものいな

い保育者の専門性は、子育て経験のある保育者の専門性よりも、本当に劣るのでしょうか。

もちろん専門性は劣らない

冷静に考えればすぐに、「子どものいない保育者の専門性は、子育て経験のある保育者の専門性より低い」とはいえないことがわかります。子どもたち自身にとって何より重要なのは、毎日の生活の中でどのくらい「わたし」の心が満たされるか、あるいは、先生がどのくらい「わたし」に向き合ってくれているか、でしょう。担任自身に子どもがいるかどうかなど、子どもたちにとっては直接の問題ではないのです。

考えてみれば、保育者自身が子育てを経験したからといって、自分のクラスの子どもの願いにきちんと寄り添えるようになるとは限りません。また、さまざまな保護者の、さまざまな思いをきちんと受け止め、適切に対応できるようになるとも限りません。

逆に、保育者自身が子をもつ親であることが、結果として保育者としての専門性にマイナスに作用することもあるでしょう。たとえば、保育者自身が自分の子育てに追われて疲れ切り、クラスの子どもに向き合えなくなってしまえば逆効果です。また、あるお母さんは「うちの子の担任の先生は、いつも自分の子どもの話ばかりして、いつの間にか先生の話を私が聞くことになっちゃうの。肝心の私の話は全然聞いてもらえない」と嘆いていました。

このように、保育者自身に子どもがいることで、保育の質が高まる可能性もありますが、その逆の影響を及ぼす可能性もあるわけで、保育者自身の子育て経験が、保育者の専門性を支える必要十分条件になるとは、考えにくいのです。

当事者性への期待

では、なぜ、親をはじめ保護者は、保育者自身に子どもがいるかどうかが気になってしまうのでしょ

うか。おそらく大きな理由の一つとして、「当事者性」への期待が挙げられるのではないかと思います。保護者は、毎日子育てと格闘している当事者です。もしも担任の先生が同じ当事者であれば、「少々言葉足らずでも、この気持ちや状況をきっとわかってくれるに違いない」と期待したり、安心したりできるのではないでしょうか。

確かに、この世の中には自分自身で経験してみないとわからないことが、たくさんあります。「話を聞くのとやってみるのとでは大違い」であるのは、あらゆる事柄について共通していえることでしょう。しかも、経験してみて初めてわかる事柄は、往々にして体感的要素を多分に含んでいるため、うまく言葉で表現しきれない内容なのです。

たとえば私も、「一日中赤ちゃんのお世話に追われる母親の苦労と孤独」なんて、自宅のトイレにさえゆっくり入っていられない状況を自分で経験して初めて「こういうことだったのか！」と痛感した一人です。孤独感に苛まれた私は、夫に「早く帰宅してほしい」と懇願したのですが、夫から返ってきたのは「亜紀は一日中、赤ちゃんとモモ（猫）と三人で一緒にいられるじゃないか。一人きりで仕事をしているのは、むしろ僕のほうだよ」という言葉でした。もちろんその後、夫は早く帰宅してくれるようになりましたが、私の孤独感を説明しようと言葉を重ねるのには、大変な努力が必要でした。

一方、近所の「ママ友」同士では、話は格段に楽でした。もちろん同じ当事者だからといって、ママたちの経験は千差万別で、いつも私の気持ちを理解してもらえたわけではありません。でも、相手も同様の経験をしている場合もあり、言葉足らずの表現でも「そうそう！」と言ってもらえて「伝わった」と実感できたり、「私だけじゃないんだ」と思えたりした時の手応えは、それだけで大きな支えになってくれました。

このように、子育て真っ最中の保護者は、当事者

性を共有することのメリットを経験しており、無意識のうちに、保育者も親であるかが気になってしまうのだろうと思います。

当事者性と専門性の違い

ですが、だからといって親が保育者に切実に求めているのは、当事者としての感覚や経験の共有ではないことは明らかです。それだけなら、親同士の会話があれば、充分に事足りてしまいます。保護者が求めているのは、子どもの生活や成長をしっかりと支える保育の内容であり、そのために必要な保育者としての力量でしょう。保育者の専門性と、保育者自身に子どもがいるかどうかは、別の次元の問題だということを確認したいと思います。

たとえば、障碍をもって生まれたわが子を受け入れられない母親がいたとします。この時、保育者に真っ先に問われるのは、「その保育者が親かどうか」とか「保育者の子どもにも障碍があるか」ではないはずです。問われるのは、その保育者が、目の前にいるその母親にしっかりと寄り添い、共に歩もうとすることができるかどうかのほうでしょう。

もしも、保育者自身の子どもにも障碍があり、「障碍をもつ子を育てる親」として同じ「当事者」であれば、その母親の信頼を得やすいかもしれません。でも、当事者であるというだけで、その後も信頼を維持できるとは考えにくいです。その後の生活の中で、世界に二人といないその子の求めに応じた、保育者の専門的なかかわりがなければ、親の期待や安心は、簡単に落胆や不信へと変わってしまうはずです。

つまり、保育者の専門性として問われているのは、保育者が自分の子育て経験の中で培ってきた知というよりも、その保育者が子どもや保護者に寄り添う経験の中で培ってきた知のほうなのです。自分の子どもに障碍があるわけでなくても、障碍をもつ子どもに豊かな保育を実現し、その家族もしっかりと支

えている保育者は、本当にたくさんいます。当事者性と専門性は、保護者一般からは見分けにくく、混同されやすいですが、少なくとも保育者や教師の側からは、きちんと分けて認識しておく必要があると、私は思います。

別の何かを経験しているということ

「でも」という読者からの声が聞こえてきます。「でも、やっぱり子どもがいない保育者よりは、子どもがいる保育者のほうが、質の高い保育ができる可能性が高いのではないでしょうか?」と。

この問いにも、私はやはりキッパリ「いいえ!」と答えたいと思うのです。

実は、コウノトリを待ち続けていたころは、私自身が「やっぱり子育ての経験がないと、私は教育者として劣るのではないか」と悩んでいました。でもある時、夫がふと、「何かを経験していないということは、別の何かを経験している、っていうことじゃないかな」とつぶやいたのです。このひと言で、目の前にあった霧はスーっと晴れていきました。

子どもをもたない保育者は、子育て中の親という当事者性はもちません。子育て経験の中で自然に培われた知恵や知識がないせいで、子どもや保護者の思いに寄り添えないかもしれないことは、確かに、ありのまま受け止める必要があるでしょう。でも、子育ての経験があろうがなかろうが、子どもや保護者の思いに寄り添えないかもしれないのは同じです。いずれにせよ、他者への尊敬と畏怖の念をもち、子どもや保護者にいっそうしっかり寄り添おうとする姿勢をもてるかどうかが、専門家として問われるところでしょう。

その上で、子どもをもたない保育者は、別の当事者性を生きていることを、堂々とありのまま認識すればよいのだと、私は考えるようになりました。たとえば、不妊で悩んでいる保育者は、子どもを授かることがどんなに奇跡的なことかを、身をもって経

験しているということなのです。その立場から、たとえば障碍をもったわが子を受け入れられずに悩む親に対して、「どんなに重い障碍をもって生まれてきた子どもであっても、生まれてきてくれただけでどれほど素晴らしいことか」と語れるかもしれません。二人目不妊の親も、そういう保育者になら、悩みを打ち明けやすいかもしれません。保育の現場で生きる可能性があるのは、親としての当事者性だけでなく、別の当事者性もあるのです。人間は皆、さまざまな当事者性を、重層的に生きる存在だからです。

ありのままの姿で生きる

こう考えてくると、人間を見るまなざしそのものも変わってきます。

「子どもがいない保育者」「結婚していない保育者」のように、「〜ない人」という否定的なまなざしを向けるのでなく、「命の奇跡を経験している保育者」「子どもへの情熱豊かな保育者」のように、保育者の尊厳を肯定的に、また重層的に見いだすまなざしへの変化です。考えてみればこれは、子どもに対するまなざしと同じです。「あれもできない子」「これもできない子」というまなざしで保育するのではなく、「こんな面も、あんな面もあるんだ」と肯定的に子どもを見つめる保育の大切さは、改めて指摘するまでもありません。

同じ人間観を、保育者同士や大人同士でも培いたいな、と切に願います。一人ひとりの保育者が、さまざまな思いを抱えながら生活する姿が、子どもの前にあること。お互いの存在を、ありのまま尊重し合い、重層的に受け入れ合う大人の姿が、子どもの前にあること。これこそが、子どもの育ちにとって何より貴重なことなのではないでしょうか。

（上越教育大学准教授）

＊この連載は、今回で終了いたします。

保育の創意工夫 11

守られる赤ちゃん

前原　寛

子どもたちの生活は、園全体に広がっています。「園生活」という言葉は、園全体が子どもの生活の場であるということを意味していますから、生活の拠点から展開される子どもの活動はオープンな広がりをもつことが必要です。保育者主導の意識が強いと室内での活動が多くなり、子どもの行動範囲は狭くなっていきます。これでは「保育室生活」であり、「園生活」とは呼べなくなります。私のかかわっている保育園では、空間の区切りが子どもの動きの妨げにならないように意識しています。

かといって、子どもがどこでも自由に入り込んでいいわけではありません。

子どもが入れない場所は園内にも当然あります。たとえば調理室は、衛生管理や食中毒対策という点から、担当者以外は大人であっても入室が制限される場合もあります。

このように子どもの出入りが制限される場所は幾つかありますが、その一つに乳児室があります。乳児は幼児と違い、起床と睡眠を繰り返す生活リズムをもっています。ですから、乳児室では一日を通して誰かが寝ていることになり、その部屋に大きな子たちが無造作に出入りしたり遊んだりすることは困ります。

乳児室を赤ちゃんの守られる場にするために、保育園によっていろいろな工夫がなされています。よく見受けられるのは、仕切りを作ることです。通常のドアだけでなく、低い柵を設けたり、簡単なロックのかかる仕切りを設けたりして出入りを制限し、乳児室で生活している赤ちゃんが守られるようになっています。

私のかかわっている保育園は、乳児と一歳児が同じ保育室で生活しています。「もも組」と呼んでいますが、そこの入り口には仕切りを設けていません。もも組の部屋はリズム室に接しています。二つの部屋の間の扉は強化ガラスをはめ込んだ引き戸です。保育中は鍵をかけませんので、誰でも開け閉めできます。

もも組でも月齢の高い子どもたちは、自分で開け閉めして出入りしています。

もも組の入り口に柵などの仕切りがないのは、当園の子どもたちは、もも組に入らないからです。もも組に面しているリズム室でどれだけ遊んでいても、その子たちが入ってくることはありません。

子どものオープンな動きを尊重する保育をしていますから、異年齢の交流は活発に展開しています。上の年齢の子どもが、もも組の子とかかわって遊んでいる姿もよく見られます。しかし、一緒に遊んでいるもも組の子が自分の保育室に戻ると、上の子たちは入り口のところで立ち止まり、決してその中に入ろうとしません。

保育者が、子どもの出入りを禁止しているわけではありません。何も指示しなくても、二歳児以上の子どもは、もも組に入らないのです。まれに新入園児が入り込むことがありますが、その時は在園の四、五歳児が「もも組に入ったらいけないよ」と教えてくれています。

おそらく子どもたちは、乳児とかかわる保育者の姿を通して、もも組の保育室が守られなければならない場であることを認識しているのでしょう。なぜなら、もも組に入ってはいけないという制限は、保育者の提案したものではなく、子どもが生活をつくる中で現れてきた自発的な制限だからです。つまり、子ど

もたち自身が、赤ちゃんを守るということを理解して自分たちの行動を制御しているのです。

当園では、もも組から五歳児の保育室まで、5つの部屋と1つのリズム室があります。どの保育室もオープンであり、遊びにおいて子どもの出入りは制限されていません。二歳児の部屋で四歳児が遊んでいることもあれば、五歳児の部屋に一歳児がいることもあります。その時々の活動や状況によって変化します。しかし、もも組の部屋だけは、それ以外の子どもがいることはありません。そこはいつでも絶対的に守られる場所になっているのです。

この連載では、何らかの創意工夫をしていることを取り上げつつ、保育の考え方を展開してきました。今月は、乳児室への出入りを制限するような物理的な工夫をしていないことを取り上げました。しかしそれは何もしていないことを意味しません。物理的な工夫はなくとも、子ども自身の行動が工夫の現れになっています。保育者の子どもへの信頼によって成り立つ創意工夫が、そこにはあるのです。

（鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長）

幼稚園の源流を求める旅

森有礼の第二次在米時代(9)

教育への具体的視座

国吉　栄

森有礼由来の書籍群

イェール大学言語学教授ホイットニーに宛てた手紙の中で、アドルフ・ドゥアイは森有礼への仲介を懇願し、森に紹介してもらうために自分の英語の本をすべてシュタイガー社から送らせるよう指示したと述べていた。

ドゥアイの英語教本は計五巻のシリーズで、国立国会図書館に一巻と五巻が現存する。一巻は製本し直されているが、五巻はそのままで、表紙裏に「東京書籍館」のシールがある。ドゥアイは未公刊自伝の中で、それらの販売数が少なく、ほとんど生活を潤さなかったと嘆いているが、米国内にもわずかしか残っていない同シリーズが、太平洋を隔てた東京書籍館時代の日本に所蔵されているなど、通常では考えられないことなのである。

英語教本と同じ年に出版された彼の*The kindergarten*第四版も同図書館に収蔵されている。関信三が翻訳し、本邦初の完訳幼稚園書となった『幼稚園記』の原典は、森有礼を経由してわが国にもたらされたものであった。

ドゥアイ書簡の発見は、わが国の幼稚園のテキストとなった原典の流入ルートを明らかにした点で、幼稚園史研究において一定の意味がある。関信三研究に携わった者として個人的にも感慨深い。しかしさらに広い視野で見るならば、森が米国から持ち帰った書籍が、それとは明示されないまま、国会図書館の蔵書になっていることが具体的に明らかになったことのほうが、より重要であろう。森の大量の書籍は、商法講習所（一橋大学の前身）の創設資金をつくるため文部省に売却されたと伝えられているが、その事実を含め、森が「図書館」に果たした役割はいまだ全容が解明されていないからである。ドゥアイの複数の著作の存在は、森が持ち帰った書籍群が国会図書館にあることの具体的例証なのである。

『新修森有礼全集』に収録された二通のシュタイガー宛森書簡も興味深い。「十九日付お手紙拝受。ご親切に送ってくださった本もありがたく受領しました。これらの書籍は、夜明けと進歩に向かって苦闘しているわが国の男女にとって間違いなく有益なものです。ご恵贈くださるという地球儀もありがたくお受けします。江戸に設立される図書館の目立つ場所に置かせていただくことになりましょう」（一八七三年二月二八日）。「日本文学に興味をもってくださるのを大変うれしく存じます。（略）江戸の書店、瑞穂屋卯三郎氏と直接連絡をお取りになると、迅速に満足のいく結果が得られると思います。お手紙は瑞穂屋に送り、その件についてあなたから連絡がくるであろうと伝えておきましょう」（同年三月十四日）。

森は取引窓口として旧知の瑞穂屋を紹介した。現在国会図書館には、森の帰国後に出版された幼稚園文献もシュタイガー社のシール付で存在していることから、瑞穂屋と同社のルートが、ある期間機能していたことは確実である。同図書館にはこのルートで輸入されたそれ以外の分野の文献も多数存在すると推測される。

管見ながら、同図書館には「森有礼旧蔵書目録」等に登載されていない森のサイン入り旧蔵書も散見される。現国立国会図書館蔵書における森有礼の多様な貢献が明らかにされることを願う。

「学制」の翻訳

特筆すべきことと思うが、森は明治五（一八七二）年に公布された学制をいち早く英訳している。同年版の教育局年報には、「日本公使森氏のご好意により」として早くも学制の翻訳が掲載されているのである。彼は「新しい学校法の目的は、あらゆる階層において、男であれ女であれ、一人も無知の中に置き去りにしないことである」と力強く宣言した。すでにこの時期に、彼が全国民を視野に入れた学校教育体系に強い関心を抱いていたことの具体的表れとして注目に値する。

幼稚園との関係で取り上げたいのは、小学校の一種として学制に掲げられていた「幼稚小学」がinfant-schoolと訳されていることである。英国で創始されたinfant-schoolは米国にも渡り、ボストンを含む幾つかの都市に存在していたが、それほど一般的な施設ではなかった。しかし森は確実にその語を知っていたのである。

大変興味深いことにエリザベス・ピーボディーは著書*Kindergarten Guide*の一章冒頭に次のように述べている。「幼稚園とは何か。私はそれを否定形で答えよう。幼稚園とは、母親が働いている間に子どもを事故や悪習から守るための古めかしいinfant-schoolではない（私が言っているのは、ペスタロッチーのものではなく、わが国や英国で行われているinfant-schoolのことである）」。

のちに幼稚園の創設を太政官に願い出る田中不二麿は、岩倉使節団の教育担当理事官として英国を視察中、ロンドンのinfant-schoolで幼稚園遊具恩物が「授業」の合間の息抜きとして使われているのを見て、infant-schoolと幼稚園を混同してしまった。彼のこの誤認はわが国の幼稚園の形に甚大な影響を及ぼすことになるのであるが、森は両者の違いを認識していたのである。

学制の翻訳でもう一つ注目したいのは、小学校の教科の最後に掲げられていた「唱歌」についてである。当時は指導者も教材もなかったため、「当分之ヲ欠ク」と付記された。森は唱歌をsinging、付記の部分をsinging, (the last-mentioned not for the present.)と訳している。

ところで森が二人の少女をニューヘイヴンに連れていった時のことである。森は高校で音楽の授業を見学した。その模様を報じた地方紙がある。記事によれば、生徒たちは板書された初見の曲を歌い、また歌曲集からなじみのある曲を何曲も歌った。生徒が弾くピアノに合わせての行進もあった。森は大変喜んで、美しい英語で感謝の言葉を述べた。森有礼は、間違いなく学校教育における音楽教育の実態を親しく知るわが国最初の人である。

これより少し前、全米教育協会大会参加後に、森が、のちに音楽取調掛として招聘されるメーソンを日本に派遣する約束を音楽関係者と交わした、という資料が報告されている（安田寛『唱歌と十字架』1993）。さらに同じころの*Times*紙には次のような記事がある。「日本の駐米公使は、同国に学校を設立する計画の具体化を進めている。（略）音楽と図画も科目として採用されることになるだろう」。ここに詳細を記す紙幅はないが、考察すべき点が多い記事である。singing, not for the present、しかしやがて、と彼ははっきり考えていたはずである。

森は開拓使派遣の少女たちにピアノを習わせていた。その一人、永井繁子がヴァッサー・カレッジ音楽科を卒業して帰国し、黎明期のわが国の音楽教育に携わったのはその大きな成果であった。ハリスのコロニーではハリスの詩に曲をつけた賛美歌が歌われていた。ボストンのキンズレー家では夫人の歌う賛美歌に聞き入った。音楽の授業も心から楽しんだ。森は当時の日本人には珍しく、洋音楽に対してまったくアレルギーをもっていなかった。

森の帰国準備で目を引かれるのは、輸送品の中に、大量の書籍に加えてピアノがあったことである。彼はピアノの輸送に千ドルの保険をかけた。学制に対する深い関心。それを実現させるための具体的方策。教育を社会の隅々まで行き渡らせようとする熱意。「唱歌当分之ヲ欠ク」現状を看過していなかった彼が、幼稚小学も名称を訳しただけで放念したはずはない。音楽の授業を実現化するために具体的方策を探ったように、学齢未満児の教育についても考えを巡らせていたことであろう。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）

園のくらしを育む 8

日本の保育文化 (2) ー芋掘りー

秋田喜代美

1　掘る経験を奪う親切心と平等意識

秋になると、園の畑で、あるいは遠足等でどこかの農園に行って、芋掘りをすることが日本の多くの園で行なわれています。芋掘りは、つるを引き、掘ると土の中から芋が出てくるという、芋との出会い体験のもつワクワク感があります。

芋は、ミニトマトやキュウリなど、植物の成長していく過程が目に見える植物とは異なる特性をもっています。主食になることもあり、焼き芋大会や芋煮会などは、食欲の秋を皆で楽しむ日本の文化として伝えられてきた活動ともいえます。また芋の長いつるは、それを使って料理もでき、子どもたちにとっては、その長さと丈夫さゆえに子どもの着想に沿っていろいろなものを作り出す遊びの契機にもなります。

この芋を巡る体験を、保育者は子どもたちに描画や造形などとして表現させたいと願い、設定活動とすることが多いように思います。芋掘りの時期に保育室の掲示を見ると、どの

園でも子どもたちの絵が飾られています。

東京の中心部の、ある園に研修でうかがった時でした。土の中のお芋が力強く描かれています。ところが、地面の上にはつるや葉はなく、どの子も二本の茎だけが少しだけ付いた絵を描いています。私にはアンバランスな絵に思え、研修で先生方に尋ねました。すると、農園に行くと、皆が平等に掘りやすいように、すでにつるはきれいに取り除かれ、一人二株ずつになっているので、それが絵に表れているのだとわかりました。一人だけ、つるや葉を描いている子がいました。先生たちから「毎年こういう絵なので、言われるまで何も感じなかった。あの子だけ違うと思ってはいたけれど」という返答が戻ってきて驚きました。その子だけは祖父母の所に遊びに行って、芋掘りの経験をしてきたからでしょうということでした。

芋掘りは芋を得て持ち帰ることだけではなく、「芋を掘る」という農業労働の一端であり、その行為を丸ごと追体験することが本来の経験ではないのだろうか、それが大人の親切心と効率的な発想で奪われてしまっているのではないかと感じました。多くの子が家庭では経験できない、園ならではの活動であればこそ、そのコアとなる経験として何を保障するのかを考えることが求められているといえるでしょう。

2　芋を巡る経験の連続性

別のある保育園で、前年の保育課程と食育計画、期案や週案、日案とその振り返りの日

誌、芋掘りの後で芋の絵を描く活動をした時に写した三‐五歳児各クラスのＤＶＤなどを持ち寄って、芋の苗植えから芋掘り、そしてその後の芋を巡る子どもたちの経験のつながりを、皆で振り返りながら語り合うことをしました。その園ではスペースの関係もあり、自園の中では年長児が芋の苗を育てていますが、掘るのは二歳児クラス、三‐五歳児は近くのお百姓さんの畑で芋掘りをすることにしていました。

芋掘りの後の活動として、三歳児、四歳児はそれぞれ各自（三歳はクレヨン、四歳は絵の具で）絵を描き、五歳児は大きな紙でのカラーペイントを使った共同制作をしていました。先生たちは、絵を描く日にはそれぞれお芋にかかわる絵本を読み聞かせ、掘ってきた芋を保育室に持ち込むといった設定をされていました。三歳児では「洗うと色が違うね」と、土の付いた芋と洗った芋を比べ、四歳児ではそれぞれに芋が目の前に配られ、描く活動をされていました。その時もやはりお芋は描かれますが、芋掘りの様子や、芋のつるや葉は描かれていませんでした。それはここでもお百姓さんが掘りやすい準備をしてくれているからです。芋掘り後の活動のつながりやあり方を先生たちと考え、今度はどのようにしていったらよいだろうと、いろいろな可能性を話し合うことができました。

やはり自分たちで育てた芋を自分たちで掘る経験をさせたほうが子どもたちにとって収穫の喜びは大きかったのではないか、いままでお兄さんお姉さんが乳児さんの分をやってあげていたがそれでよかったのだろうかという話が出ました。また、絵本を読んだりしなくても、芋掘りをしている時の写真を見合ったり、持ち帰った芋があれば、描くのにはよ

かったのではないだろうかという話も出ました。さらに、お百姓さんに掘らせてもらいに行くだけだったけれど、お散歩の時に芋畑を見たり、芋掘りをさせてもらった後、「子どもたちがお陰でこんな絵を書いたんですよ」と報告したりすれば、もっと密に連携できたかもしれないという話も出てきました。芋を掘り上げ、収穫に至った喜びを子どもたちがもてるようにしていくには、どのような活動こそが経験の連続性をつくり出すのかを振り返りました。

ジョン・デューイは著書『経験と教育』の中で、「あらゆる経験は、願望や意志とはまったく無関係に、引きつづき起こってくる更なる経験のなかに生きるのである。したがって、経験に根ざした教育の中心的課題は、継続して起こる経験のなかで、実り豊かに創造的に生きるような種類の現在の経験を選択することにかかっているのである。[注]」と述べています。私たちが先輩たちから伝統的に受け継いできている活動においても、どの経験が、子どもたちにとって、より実り豊かで創造的な経験を生み出し得るのか、なぜその経験を、いま、この子どもたちにしてほしいと願うのかを改めて少し長い目で見て振り返ることも必要かもしれないと感じさせてもらった研修でした。

皆さんの園ではどのような経験が保障されていますか。

（東京大学大学院教授）

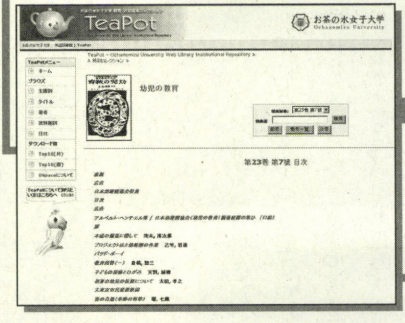
注（引用文献）

ジョン・デューイ『経験と教育』市村尚久訳　講談社学術文庫　二〇〇四年　p. 34-35

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて（19）

コンテンツを通じて見る「母」の〈名〉とメッセージ

秋山麻実



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。
URL：http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/

▼コンテンツ化される情報

デジタル化により、情報の質は変わる。復刻版『幼児の教育』では、物理的な厚さ、重さを感じ、幾つもの興味深い記事に目をとられながら読んでいたものが、クリックを重ねて目指す記事を引き出せるようになると、何が変わるのか。

まずは、極めて便利になる。通信環境以外の物理的な条件から、私たちは解放され、時と場所を選ばずに本誌を読むことができる。

その一方で、物理的な質感が捨象される。私たちは厚さ、重さ、大きさがあったことそのものを忘れる。かつて雑誌を読者が手にし、表紙を眺め、端から、あるいは関心のある箇所から読み、広告を見た、その感覚がなくなる。目次は記事の重要性と順番を示す情報ではなく、「コンテンツ」（中身・内容）情報に過ぎなくなるし、雑誌の内容と編集がもつ、価値

そのものを読者の中に育てる機能を、私たちがなぞることは困難になる。

もちろん、一号ずつ読むこともできるし、雑誌のもつ啓蒙的メッセージは消失しない。しかし、データベースの最大の利点は検索である。データベースは、収録されたコンテンツを均質化する（たとえば、等間隔に並んだ表題）。検索とは、その中からキーワードを含むものを取り出すことであり、つまりそれは、均質な情報群を、内容によってではなく記号によって、二分することである。

データベース上ではこの分割により、特定のコンテンツを入手することは容易になるが、雑誌編集自体がもつメッセージを受け取る機会は減る。意図しない情報との出合いの契機は、雑誌のページをめくる中というよりは、検索ワードを共有する中にあることになる（たとえばレコードやCDからコンテンツのダウンロードへ、という音源入手方法の変化の中では、これはすでに起こっている）。

▼〈教育＝保育＝子育て〉の地平と女性の〈名〉

ところで、現代における情報のデジタル化と同様、雑誌は、明治維新を迎えた日本において、新聞等と共に新しいメディアであった。女性雑誌は一九二〇年前後に創刊ラッシュを迎え、女性の教養や道徳への政治的・教育的配慮と娯楽を継続的に提供する媒体として定着していったが[注1]、その中にあって、明治三十四年に創刊された『婦人と子ども』は、女性雑誌として見れば後発ながら、保育専門誌という立場から「女性」を名付け直すものだった。「婦人教育の普及」の重要性を指摘した「発刊の辞」からも明らかなように、読者ターゲットは女性である。しかしそれは漠然とした「女性」ではなく、『婦人と子ども』の広告（『女学世界』創刊号、明治三十四年）を見ると、読者は「少女」「母」「（女子）生徒」「教員」という

ふうに名付けられている。そしてこれは、『婦人と子ども』のねらいとする機能と関連付けられている。

大に興味を感ぜしむると共に大に智能を開き性情を養ひ且つ日常家庭の生活を益せしめんことを期し、文章は特に平易に認めて假名さへ附したれば家庭必須の讀本たるは言ふに及ばず、小學校、高等女學校、女子師範學校等の生徒には科外唯一の必讀書たるべく、幼稚園、小學校、高等女學校、師範學校等の教員には子女教育上の良参考書たるべし。

本誌は創刊から第七巻第三号まで、各記事について（子ども）（家庭）（学術）（文苑）（説林）等といった分類を施していた。途中、分類の変更はあったが、ともあれそれらは一見、他の女性雑誌が扱う修養、教養、文学、社会、家事、保育といった内容と重なっているように見える。しかしこの分類を、「少女」や「母」を対象に家事や子育てについて発信し、「教師」のために保育や教育について（説林）で扱い、読者全体に対して、子ども向けの読み物や遊戯、読者自身の趣味や教養のための文学や情報を提供すると考えれば、本誌は「女性」を分節化し、名付け、それに対して機能的に編集された雑誌であったといえる。またその〈名〉は緩やかに結び付き、〈教育＝保育＝子育て〉と連なる地平を担うものだった。

こうした地平を切り拓くために本誌は、「平易に」「假名」をふる形式で、かつ専門的に、子どもの育ちについて語るという文法を必要としていた。また専門的あるいは規範的知識の伝達だけでなく、読者への呼びかけや、保育や子どもに関する実践家の目を通した記述や、実践的な保育教材や遊戯の素材・歌などが盛り込まれていた。つまり雑誌が読者を、啓蒙だけでなく声の多層性によって、生み出してい

たのである。

▼コンテンツからみる「戦時」の「母」

本稿執筆時点では、二〇〇七年十二月までの記事がインターネット公開されているが、その中で、こうした〈名〉は、どれだけの表題に含まれているのか。検索すると、「母」が379、「教師」83、「保姆」115、「保育者」232、「娘」15、「少女」11、「生徒」15という結果が出た。

明治期に「保育」という新しい概念とその方法・内容が発展していく際に、従来の子育てを参照点にしつつも、新しい「家庭教育」のあり方を提唱するという、いわば合わせ鏡のような言説が構築される。私はその様相を、本誌を手掛かりにして描き出そうと試みたことがあるのだが[注2]、今回データベース検索をすると、数の上では、「母」についての記事が特に多いことがわかった。その多くは、「母」に向かって発信されたメッセージである。「母」による手記はしばしば見られるし、初期には連載もある。また母の会等についての記述もある。

しかし、その半数以上を占めるのは、「幼児の母」という連載コーナーであり、第四十巻第一号から第四十三巻第十号まで、その数225にのぼる。これは、抜き刷り四ページを、園を通じて母親たちに頒布するものであった。幼稚園教育を通じた「家庭教育」の―家庭における教育、と同時に家庭のあり方を教育する―メッセージだったと考えられる。

こうした「家庭教育」メッセージが、戦時の国家体制と連動する時期に発信されていたことは、興味深い。第四十二巻第一号からは、記事の上に「大東亜戦争必勝完遂」と書かれている。一見して戦時意識を喚起する表題は、以下のとおりである。

「時局下の母」　（第四十巻第五号）

「母の時局認識」　（第四十巻第七号）
「新體制」　（第四十巻第十号）
「新體制の母」　（第四十一巻第二号）
「戦時家庭」　（第四十二巻第一号）
「教育講話　我子に國民感情の涵養：日本國民たることの喜び」　（第四十二巻第一号）
「母の大東亞知識」　（第四十二巻第五号）
「となり組」　（第四十二巻第十一号）
「我が子、國の子　國の子、我が子」　（第四十三巻第一号）
「戦時家庭の教育力」　（第四十三巻第二号）
「大東亞戦下の入園」　（第四十三巻第四号）
「戦下の夏の子」　（第四十三巻第七号）
「教育問答　幼兒の時局認識：この夏の家庭の心得の第一」（第四十三巻第七号）
「この大きな時代の日本の母」　（第四十三巻第八・九号）
「戦時下の母の三大任務」　（第四十三巻第十号）
「母の講座　戦時家庭教育心得：文部省指示要項解説」（第四十二巻第十～十二号）

そのほか料理コーナー、「幼稚園から」コーナー、倉橋による「教育講話」「母の講座」「幼稚園でしていること」「わが子を良い子に」シリーズなどがある。

この連載では、「母」は発言主体というより、もっぱら読み手である。そして総力戦体制が、啓蒙的な、あるべき「母」の言説を取り込んでいく。たとえば倉橋の「教育問答　幼兒の時局認識」では、

「今、既に、國が戦をしてゐるのです。それを、子どもにしっかり知らせることが、いゝも悪いもあるものですか」

「おとなのわれわれに分かるやうには分からないでせう」

とし、戦争について家庭で子どもに伝えるべきであ

るとする。またその際、子どもの「分かる」は、大人との比較の内に位置付けられてしまうのである。

しかし一方で、子どもの育ちについての専門誌である以上、子どもの目線に立つ保育や子育ての重要性もまた、継続して発信されざるを得ない。たとえば前出の倉橋と同じページに、留岡よし子が、咳で胸が痛んだ子どもの

「僕の大和魂がこわれたんぢやないでせうか」

という言葉を取り上げ、子どもの「分かる」ように話さなかったことを反省している。

また、時には、平時と同様に子どもが育てられることの大切さが訴えられる。第四十二巻第一号「幼稚園から」欄では、

「幼稚園では、お子さん方と、平和の時と同じやうな、なごやかさで遊び、唱ひ、踊つてゐます」

「私達は、お子さんを守ってゐます。お子さんの心を守ってゐます」

とある。

このように戦時下、「母」へのメッセージには、子どもの育ちを共有する言葉と、啓蒙的な言葉、子どもと大人の目線、平和と戦争との混在が見られた。おびただしい数の啓蒙的メッセージは、時局に合った「母」教育を担った。子どもを出発点とすることは、平和を暗示する契機でもあったが、しかしそうした言説は、子どもに軍国主義を教えることと並列であることを強いられた。コンテンツが示す整然とした「数」は、そうした言説に、読者がいかにさらされていたかを、数秒で見せてくれる。

（山梨大学准教授）

注

1　小山静子『貴女の友（復刻版）解説』柏書房　二〇〇七年

2　拙稿「明治後期の「母」と保姆―『婦人と子ども』誌をてがかりに―」『東京大学教育学研究科教育学研究室紀要』第二十三号　一九九七年六月

（参考文献）

保育の現場から

イチョウの葉っぱの枕やさん

佐藤寛子

幼稚園の秋。園庭の高台（私たちの園では、「おやま」と呼んでいます）のイチョウの大木は、今年もその葉をきれいに黄色く染め、幼稚園に秋が訪れたことを伝えてくれます。イチョウの木がその存在を最も主張するのがこの季節。

そんな中、この木に守られて私たちの暮らしがあることを、改めて感じる出来事がありました。

おやまに出かけよう

ここ数日、仲良しの友達とうまく気持ちが合わず、浮かない表情で過ごしていたY子を、私は「おやま」に誘うことにしました。

保育室で所在なげに過ごすより、広い「おやま」に出かけ、体を動かすことで、気持ちを切り替えることができるのではないかと考えたからです。

Y子は初め、私の誘いにいまひとつ乗り気ではない様子でしたが、たまたま居合わせたI子とR夫の「行こう！　行こう！」という勢いに押されて、一緒に外に飛び出しました。ところが、その日はどんよりした曇り空。外に出てみて、「いまひとつだな」と私は

がっかりしました。けれど、I子とR夫はすでに「おやま」に続く階段から、「Yちゃん、先生、早くー」と叫んでいます。Y子とその後を追いかけ、みんなで一気に「おやま」に駆け上がりました。

「おやま」に着いた瞬間、目に飛び込んできた風景に、私は思わず息をのみました。横にいた子どもたちも、一瞬足を止め、「すごーい！」「きれーい！」と叫びました。

「おやま」は一面黄色に染まっていました。昨日の風で落ちた葉が地面を覆い、まだ木に残っていた葉が、吹いてきた風で空を舞っています。曇りとは思えない明るさ。園舎や下の園庭とはまるで別世界でした。

「おやま」には、すでに五歳児たちがいて、くま手やほうきを使って一か所にせっせと落ち葉を集めていました。聞くと、「おやま」にある「土管の山」のふもとに落ち葉のベッドを作っているようで、「年中組も土管の山のてっぺんからダイビングしていいよ！」と言ってくれました。

「やってみよう！」と私たちは土管の山に登り、てっぺんから走り降りてベッドに飛び込みました。あおむけになってベッドに横になると、何だかおかしくなって、みんなでケタケタ大笑い。「草のにおいがするね」とY子。落ち葉のベッドのふわふわした暖かさと、Y子の久しぶりの笑顔に、私は幸せな気持ちになりました。

枕作り

何度かダイビングに挑戦したあと、「じゃ、私たちは枕、作ってみる？」と私が言うと、「枕？　どうやって作るの？」と興味をもった様子の子どもたち。急いで保育室にビニール袋と粘着テープを取りに行きました。ビニール袋にイチョウの落ち葉を詰めて、粘着テープで留めるシンプルな枕。何年か前にも楽しんだことがありました。

子どもたちは、すぐにイメージがもてたようで、ビニール袋に適当に落ち葉を詰め始めました。粘着テープで封をし、一度地面に置いて寝心地を試してから、もっと葉っぱを詰めてみたり、逆に減らしてみたりしています。中に詰めるイチョウの葉っぱの量の違いで、柔らかさに微妙な違いができるのです。

「草のにおいがするのがいいねー」などと子どもたちが言っているのも聞こえてきました。寝転んだ時、頭の重みで枕から空気が漏れ、すーっという音と一緒に草の香りが漂ってきます。

子どもたちの様子から、ビニール袋の口は、何度も開け閉めができ、なおかつ、密封しない留め方がよいことがわかりました。

出来上がった枕で空を見ながら寝転んでみたり、高く投げ上げて両手でキャッチしてみたり、友達にパスしてみたり……。思いのほか楽しめる手作り枕を子どもたちも気に入ったようで、自分の作ったものに名前を書いてほしいと言ってきました。せっかくなら、枕カバーを付けて、自分のだということがわかるようにするのはどうかと思い、私は不織布を用意し、子どもたちの枕一つひとつに巻き付けました。

I子、R夫は枕カバーに思い思いに好きな絵を描き込みましたが、Y子は、この時になると再び表情を曇らせ、私に描いてほしいと言ってきました。

「自分の好きな絵を描いていい」「自分だけの枕」。友達とのかかわりの中で、自分とは何なのか？　自分は何が好きなのか？　何をしたいのか？　と、「自分」といや応なく向き合うことが増え、戸惑っているY子の思いが伝わってきました。

Y子の枕カバーの絵は一緒に描くことにしました。

「その枕、僕にください」

その日の降園時、手作りの枕を両手で抱きかかえて座っていたY子に、U夫が枕を自分に譲ってほしいと

せがみました。

「先生と私で作ったから…」と断るY子。「U君も、明日一緒に作ろうよ」と私も声をかけました。それでも、U夫はかなり執拗にY子にお願いし、しまいにはY子の前にしゃがみ込んで、「おねがい！」と両手を合わせる始末。必死のU夫の様子に「しょうがないなあ」とY子は枕を手渡しました。

渡さなくていいのに……と思いながらも、U夫の必死な様子を見て、私もただ事ではない気がしていました。また、枕を譲ってほしいとせがむU夫に、Y子が躊躇しつつも枕を手渡したのは、本当は自分の力でいまの状態から抜け出そうとしている表現のようにも感じ取れました。私の手を借りず、自分で作り上げた枕であったなら、Y子は手渡さなかったかもしれません。

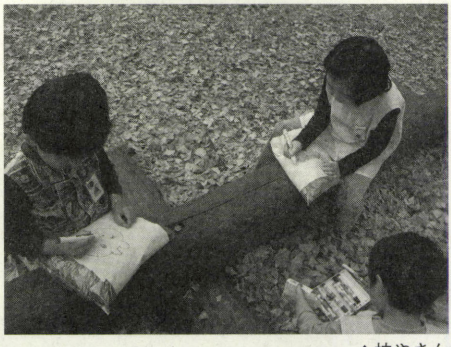
「ありがとう！」とお礼を言い、U夫はその日、うれしそうに大事に枕を抱えて、家に帰りました。

枕やさんの開店

翌日U夫は、登園するとすぐに「おやまで枕やさんがしたい！」と私に言ってきました。保育室の机や椅子を「おやま」まで運んでいきたいと言うのです。いますぐ取り掛かりたいU夫の気持ちが伝わってきたものの、登園時でまだ全員の子どもたちが来ていない状況だったため、私はなかなか動きだせずにいました。U夫は、学年担当のS先生に頼み、一緒に準備を始めました。私もビニール袋や粘着テープ、カバー用の不織布をS教諭に渡し、好きな絵が描けるようにカラー水性ペンのセットが幾つかあるといいことを伝えました。

少し経って、ほかの子どもたちを誘い「おやま」に行くと、U夫の枕やさんは、すでに大勢のお客さんでにぎわっていました。自分で作れる人には、ビニール袋を手渡し、葉っぱを詰めてもらい、詰め終わった人

には、ビニール袋の口を粘着テープで留めたり、カバーを付けたりする手伝いをしていました。枕カバーに水性ペンで好きな絵を描けるコーナーもありました。自分で作れない人には、絵だけを描くことができるような無地のカバー付きの枕があったり、U夫の得意な電車の絵を描き込んだ完成品も用意されていたりしました。S先生とU夫とで、工夫して遊びを進めていることが伝わってきました。



▲枕やさん

お店をせっせと切り盛りするU夫の様子に刺激を受けて手伝い始める子どもたちもしだいに増えていきました。H夫は、材料が少なくなると保育室に走って取りに行き、補充していました。そして、Y子は、昨日描かなかった枕カバーを描き、自分用の枕を一つ完成させると、年少児に枕カバーを付けてあげたり、水性ペンを手渡して「好きな絵を描いていいんだよ」と声をかけたりしていました。

忙しそうにお店を切り盛りするU夫は、私の姿を見つけると近寄ってきて、「昨日、お母さんが、あの枕でお昼寝したんだ！」と、うれしそうに話してくれました。

葛藤しつつ、いまを前向きに生きる子どもたち

四歳児の秋。子どもたちは園の生活に慣れ、自分の場所として安心して遊び始めるようになります。しかし同時に、Y子のように、自分と友達の思いの違いに気づき、うまく遊べずに戸惑うことが多くなるなど葛藤することも増えてきます。そんな時、友達との関係

を超えた自然とのかかわりの中で、葛藤を乗り越えていくエネルギーを得ることができるのではないかと考え、私はY子を園庭の「おやま」に誘いました。

イチョウの葉の鮮やかな黄色、土の上に幾重にも重なった落ち葉の感触、漂ってくる草の香り。この環境をもたらした大きなイチョウの木の存在。「おやま」の上は生きるエネルギーが静かに満ちていました。Y子が、友達や教師と一緒に落ち葉のベッドに飛び込み、大声で笑い合うことができたのは、この環境があったからだと感じます。

一方、譲ってほしいと必死で頼んだU夫もまた、葛藤のただ中で過ごしていました。

この出来事の数日前、U夫の母親が「U夫が言うことを聞かず、ここのところ親子げんかが絶えない。自分の接し方が悪いのだろうか」と涙ながらに訴えてきたことがありました。傍らで弟と一緒に走り回って遊んでいたU夫が、母親のただならぬ様子に気づかないはずはありません。弟の子育てに大変な母のことを理解しながらも、U夫自身の存在が危うくなることが、家庭の中でも多かったのではないかと想像できます。

草の香りのする柔らかな枕。自分の好きな幼稚園のイチョウの葉っぱが詰まっている枕。「これがあったら、お母さんはゆっくり休めるに違いない」そんなことをU夫は考えたのでしょうか。Y子に必死でお願いし、何が何でも持って帰ろうとした、あの時のU夫の気持ちに改めて気づきました。Y子が譲ってくれたこと、母親が喜んでくれたこと、そうした思いが翌日の枕やさんにつながっていったのだと思います。

悩んだり戸惑ったりしながらも、物や人と豊かにかかわり合って、自分の力で前向きに歩もうとしている子どもたち。イチョウの木に守られながら、そんな子どもたちとの日々の暮らしを、私も一緒に生きようと改めて感じた秋の出来事でした。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

編集後記

倉橋は「炉辺味」という初冬の文章で、「どこかまだわざとらしさの多い教育」に「おっとりした田舎家などの炉辺に似た味」が出ないかと綴っています。

いま、保育の質をどう評価するかが盛んに論議され、人員配置やモノ的環境などの目で見えて比較的評価しやすい部分に対して、保育にかかわる人たちの内面や関係性、育ちの問題などをとらえる方法が難しいとされています。倉橋はそれを身体感覚で感じ、どこか「幼稚園臭い」と嗅ぎつけたり、「大人の心のはだのなんとあれている」かを指先で探り、その違和感にこだわります。

特集「いま、倉橋と出会う」は、今回で一応最終回です。ただ、森上先生のインタビュー後半部分は、次の12月号に掲載されますのでお楽しみに。（H）

幼児の教育 第109巻 第11号

平成22年 11月1日発行
編集兼発行人　浜口順子
編集担当　金子めぐみ・田中恭子
発行所　日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所　株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604（編集）
振　替　00190-2-19640
印刷所　図書印刷株式会社
定　価　550円（本体524円）

©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力　フレーベル館
表紙絵　後宮ひろみ
扉題字　津守　眞
本文カット　田崎トシ子
編集スタッフ　吉岡晶子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613（営業）

次号予告

〈特集〉第63回日本保育学会から

大越和美　髙橋弥生・谷田貝公昭　小山祥子　小山みずえ　山崎徳子

・森上先生インタビュー　**倉橋惣三と私（2）**

（聞き手　浜口順子・佐治由美子）

☆次号の内容は、都合により変更される場合があります。

『幼児の教育』バックナンバーがネットでご覧になれます！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"
http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/
へ、アクセスしてください。
明治34年発行の創刊号から、現在、平成19年発行の第106巻まで公開されています。ご意見・ご感想などは、youjimail@yahoo.co.jpまでお寄せください。

好評発売中

55冊の絵本紹介！ 読み聞かせのアイデア、エッセイまで！
読み聞かせの達人による、絵本ガイドブック

聞かせ屋。けいたろう

絵本カルボナーラ

～ おいしい絵本を召し上がれ！ ～

絵本を子どもにも大人にも！

著者が読んできた秘伝の 55 冊の絵本を、オールカラーで掲載。作品紹介、読み聞かせの Q&A からテクニック紹介まで。読み聞かせの活動を通した、新たな絵本の魅力が満載の 1 冊！

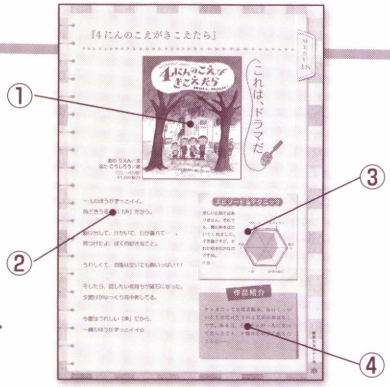
聞かせ屋。けいたろう／著

21×15cm　96 ページ　定価 1,260 円（税込）

10921

作品内容、読み聞かせのエピソード&テクニックや、はたまた、読み聞かせ実況中継まで！
素敵な絵本との再会をお届けします。

① 絵本表紙
② けいたろうコメント
③ 読み聞かせのエピソード&テクニック、作品データ
④ 作品紹介



キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇九巻　第十一号　平成二十二年十一月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

好評発売中

● シリーズ３巻完結！ ●

総勢101人から贈られた、保育へのメッセージ

THE保育 −101の提言− vol.3

無藤 隆　編著

10503

26×19cm　226ページ　定価2,100円（税込）

21世紀の子どもの育ちをどう捉え、どう見据えていくか、様々な分野の著名人による保育への提言。vol.3は、フレーベル館の保育図書編集委員のほか、保育研究者や各界の著名人の提言も掲載した完結編。

執筆者（50音順）

網野武博（東京家政大学教授）、池谷祐二（脳科学者）、池谷奉文（日本生態系協会会長）、石津ちひろ（絵本作家）、内田麟太郎（絵詞作家・詩人）、大澤　力（東京家政大学教授）、大日向雅美（恵泉女学園大学大学院教授）、岡本拡子（高崎健康福祉大学短期大学部教授）、落合恵子（作家・クレヨンハウス代表取締役）、かづきれいこ（フェイシャルセラピスト・歯学博士）、金井真介（ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン代表）、上遠恵子（レイチェル・カーソン日本協会会長）、小林紀子（青山学院大学教授）、古賀稔彦（柔道家）、小菅正夫（獣医師・旭山動物園前園長）、佐伯一弥（東京家政大学短期大学部専任講師）、佐々木宏子（鳴門教育大学名誉教授）、汐見稔幸（白梅学園大学短期大学学長）、柴崎正行（大妻女子大学教授）、鈴木　寛（文部科学副大臣）、鈴木光司（作家）、高橋　和（女流棋士）、ダニエル・カール（タレント）、苫米地英人（脳科学者）、長倉洋海（写真家）、長崎宏子（スポーツコンサルティング会社取締役・元五輪水泳選手）、浜　美枝（女優）、パトリック・ハーラン（タレント「パックンマックン」）、細谷亮太（小児科医・聖路加国際病院副院長）、増田まゆみ（目白大学教授）、師岡　章（白梅学園短期大学教授）、山極寿一（国際霊長類学会会長・京都大学教授）、葉　祥明（絵本作家）、吉村作治（エジプト考古学者）、渡邉眞一（学校法人初音丘学園理事長）

好評発売中

10501

vol.1

【執筆者】

小柴昌俊（ノーベル物理学賞）
椎名誠（小説家）
田原総一朗（ジャーナリスト）
坂東眞理子（評論家）
日野原重明（医者・文化勲章）
やなせたかし（絵本作家）
ほか多数

10502

vol.2

【執筆者】

アグネス・チャン（タレント・日本ユニセフ協会大使）
紺野美沙子（国連開発計画親善大使・女優）
ピーター・バラカン（ブロードキャスター）
村上康成（絵本作家）
米村でんじろう（サイエンスプロデューサー）
ほか多数

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。